學界消息

日本經濟政策學會第二十回大會

「現代日本經濟における國家の役割」を共通論題として掲げた日本經濟政策學會第二十回大會は、五月二十八・九の兩日にわたって、日本大學で開かれた。

最初に、總論的に「國家の役割」を檢討すべく、慶應大學の氣賀健三氏が「現代の日本經濟における國家の役割」と題して報告された。國家の役割は民主主義的國家における政府の役割として把握され、政府の任務と目的とを檢討し、結論として「市場經濟的」生產力の增大、雇用問題の解決、社會保障による貧困の追放が、現在の政府の課題であることが述べられた。

經濟主體の多くが短期的な眼前の問題に忙殺されるのに反して、長期的な經濟計畫を立案し檢討するのは國家の役割であろう。一橋大學の鹽野谷祐一氏は「わが國長期經濟計畫の問題點」として、今後二十年間にわが國經濟に生ずる問題點を檢討された。特に二十年後には勞働力成長率が急激に低下して、完全雇用、二重構造の解消が必然的に實現する。問題はその間にあって、產業構造政策をどのように策定してゆくかにある。現在においては最適資源配分基準によることなく、非近代的部門を利用して、近代的部門の一層の發展、すなわち、重化學工業化をはかるべきであるとの意見が述べられた。

「經濟成長と景氣變動との關係における國家の役割」は、大阪市大の吉田義三氏によって報告された。日本經濟の高い成長率のポテンシアリティを考察する場合に、これまでは常に「純」投資で考えられているが、リプレイスメントとして問題を把握すべきである。リプレイスメントも實質賃金の上昇も、マーケット・フォースによって機能されない場合に、政策の必要なことが主張された。不況期にあっては、賃金下落のタイム・ラッグが技術革新の促進的要因となるが、現在では不況期にあっても價格が低下せず、勞働節約的技術革新が阻止されているとされるのである。

「產業構造の變化と國家の役割」については、企業集中の問題を中心として、大阪市大の上林貞治郎、儀俄壯一郎の兩氏によって、儀俄氏から報告がなされた。日本の獨占體を世界經濟における獨占體と比較して、これを中小企業的であるとみなし、財閥解體が日本の獨占體にとって不利であって、アメリカの獨占體には有利であったこと、解體の方針が商事部門に嚴しく金融部門に緩やかであった點が指摘され、さらに、日本の獨占體とアメリカの獨占體との結びつきが、技術提携の形で行なわれていることが報告された。

「雇用問題と國家の役割」は、日本女子大學の松尾均氏から報告され、戰後日本の雇用問題における資本の自己矛盾を「雇用政策の側における失業政策化、失業政策の側における雇用政策化」の照應として指摘され、失對事業の就勞資格の强化、失

業保險の給付條件の嚴格化など、雇用の近代化とともに勞働者に對する制約が强化され、有效な雇用增大政策は行なわれなかったことが報告された。

「國家の役割を具體的な貿易政策の果した役割」に卽して檢討し、神戸大の藤井茂氏が「經濟成長と國際貿易における國家の役割」と題して報告された。戰後日本經濟の成長過程を、昭和三十一年上期頃を境として、復興期と發展期の二局面に分け、前者の基本的樣相と供給力不足――需要超過（インフレ基調）、後者のそれを供給力超過（デフレ基調）として捉え、基調の轉換に應じて政策指向重點が變わり、貿易の自由化が問題とされるゆえんを明らかにされた。

自由論題は三つの分科會に分れて報告されるという盛況であり、このうち「現代混合體制における國家の役割」一橋大、坂本二郎氏、「國家と經濟」關東學院大、大門一樹氏、「國家意志と國家權力の關係」立敎大學、西山司氏の報告は、共通論題と關係をもつものであった。その他の自由論題には「ハムバーグの經濟成長理論について」日本大學、近江谷幸一氏、「中小企業における設備投資效果」東海大學、吉澤榮藏氏、「資本蓄積と中小企業――戰後過程についての若干の分析」、群馬大學、藍原豐作氏、「經濟政策と社會過程」靜岡藥科大學、久米收氏、「わが主要貿易港發展形態の分析――名古屋・四日市兩港を中心として――」愛知學藝大、松浦茂治氏の諸報告がなされた。

共通論題に關する總括討論は、報告者の他に、討論參加者として明治大學赤松要氏、東京女子大學伊藤善市氏、名古屋大學北川一雄氏、專修大學小林義雄氏、慶應大學伊東岱吉氏、さらに、各報告のさいの座長團、神奈川大學大熊信行氏、名古屋大學酒井正三郎氏、日本大學迫間眞次郎氏、京都大學靜田均氏、中央大學南亮三郎氏、一橋大學板垣與一氏を加えて、板垣氏が座長となり、第二日の午後一時半より七時に至るまで熱心に行なわれた。

はじめに各座長より、各報告の問題點と質問の要旨について簡潔な說明があり、つづいて報告者の答辯、討論參加者の再度の質問および意見が述べられ、板垣氏より全報告について問題點の關連について說明的な要約がなされて、一般的な討論に入った。

ここでは個々の報告に關する討論の要點には觸れる餘裕がないので、總括討論において取上げられた問題にのみ言及することにしたい。第一の問題點は、經濟政策の主體としての國家の本質を論ずるべきでないかという赤松氏他の批判、第二の問題點は、長期的にみて二重經濟構造が解消するというとき、その具體的な解消の過程如何という伊東氏の問題提起があり、これに關して小林氏がイギリスにおける解消過程の歷史的事實と、わが國の場合における農業勞働力の動向とを對照して指摘され、經濟企畫廳大來佐武郎氏から農業の近代化の進展についての指摘がなされた。

國家の本質に關する問題については、イデオロギー的對立が愼重に回避され、二重構造の解消過程についても、非近代的部門を利用して重化學工業化を推進するか、あるいは、國際的獨

占資本の政策即國家の政策として、階級的に反獨占政策を有效にする方途をとるかというような、イデロオギー的要素も討論の背後に感得された。個別報告とそれをめぐる質疑の要約説明に時間がかかりすぎて、これから活潑な討論という時に、時間切れになった感があった。

現代日本經濟の發展段階の規定、あるいは現狀把握あるいは、その假設的前提は明確になされず、結局、個別的な政策問題の討議に終ったとの批評も聞かれなくはなかったが、熱心な報告と討議、さらに懇切な問題整理によって今後の討論の基盤が確立されたという意味で、學會の發展を約束するものと言えよう。

第一日の夕刻に學士會館で、盛大にして和やかな懇親會が開かれ、會員六二二人、團體會員一二人を擁する學會として、はからずも二十周年を祝う會となった。第二日は午後七時近くまで退席者もほとんどない熱心さで討論がつづけられ、代表理事山中篤太郎氏、準備委員長加田哲二氏の挨拶を最後に、第二十回大會は幕を閉じた。

（一九六〇・六・一）（磯部浩一）